

## 童謡・唱歌の里

梶 亨(観光文化創造研究所長)



飯山市は童謡『故郷』『朧月夜』などを作詞した高野辰之(たかのたつゆき)と関わりのある土地。詩に織り込まれた風景や抒情は、飯山周辺のものともいわれます。今月の「さろん」は、飯山及び日本の童謡・唱歌を研究されている梶亨さんからのお話です。(2016年6月21日開催)

## ■ ペリー来航から始まる童謡・唱歌の歴史

1853年、ペリーが浦賀に来航し、随行した軍楽隊が演奏した「ヤンキードゥードゥル」、これは日本人が初めて耳にした西洋音楽であった。昭和になって京大山岳部が『アルプス一万尺』の替え歌にして広めたメロディである。

その後明治11年、政府は近代教育の一環として音楽が必要と考え、文部省の若手職員をアメリカに派遣し、アメリカの家庭や学校で歌われていた賛美歌や欧州の民謡を参考にして、子どもたちが歌う唱歌をつくった。初めは蛍の光など外国音楽に日本の詩を付けるのが多かったが、その後、国文学者の高野辰之、「花」を作詞した武島羽衣などの格調高い詩に、メロディがつけられた。

童謡の方は、文部省唱歌への不満から、のちに小説家の鈴木三重吉とともに、北原白秋、野口雨情、三木露風たちが起こした「赤い鳥運動」がきっかけで、子どもの空想や詩情を育む詩をもとにして歌が作られた。童謡の最初は西条八十の「かなりや」だ。八十は生涯に三千曲も作っている。

昭和20年代に日本童謡を歌う会がアメリカで童謡・唱歌の公演をしたところ、子どものために、一流の文芸家・作曲家たちが素晴らしい歌を残していることに、アメリカ人が驚いたという。

## ■ 高野辰之が長野の風景を詩に

国文学者高野辰之は明治9年生まれ、長野県豊田村(合併し現在の中野市)の農家の長男。父が小布施高井塾に通う勉強家で辰之も本好きだった。22歳のとき学問で身を立てようと上京し、東京帝大教授の書生となり、「日本歌謡史」で帝大の文学博士号を取った。

飯山には「菜の花公園」がある。残雪のある斑尾をはじめ周辺の緑の山々に映える一面の菜の花の黄色の絨毯、そばに千曲川がゆったり流れ、非常に美しい。日本人の心の原風景ともいえる故

郷の絶景だ。高野辰之はこうした風景を詩にした。「朧月夜」「故郷」「春がきた」「春の小川」そして「もみじ」を作詞した。作曲は岡野貞一だ。

童謡・唱歌は、作詞者がここでこれを書いたとは一切言っていない。そのため後世、「ここが原点だ」と主張する人もいる。中野市には辰之の生家があり、飯山市には朧月夜の碑がある。ふるさとの原風景のあるまちが、これは自分のところの歌だと、それぞれに主張してもよいのだろう。

## ■ 童謡「故郷」が日本の原風景を呼び覚ます

東日本大震災の1か月後、ブラジド・ドミンゴがNHKホールで「故郷」を日本語で歌い、5ヶ月後、石巻で指揮者佐渡裕がコンサート最後の曲に「故郷」を選んだ。その後も大震災を思って多くの人々が「故郷」を歌った。日本のどこにいても、誰にとっても「故郷」は、自分自身のふるさとの歌として受け止められている。

千葉県御宿町には「月の砂漠」、横浜市には「赤い靴」、新潟市には「すなやま」、静岡市の「背くらべ」、それぞれのまちが碑を建てている。

童謡・唱歌がこれほど日本各地に足跡を残しているのは、日本の優れた文芸家、作曲家、国民、放送機関が一体となった一大文化運動であるからだ。日本らしい風景が歌に刻まれている証として、童謡・唱歌を聞いていただきたい。

平成16年、日本の自然や日本人のもつ情緒などを背景に文化財法が改正され「重要文化的景観」ができ、そのまちらしい景観、地域のアイデンティティを基にした個性豊かなまちづくりが可能になった。飯山市の棚田、神社、溜池などが「小菅の里及び小菅山」重要文化的景観として指定されている。

## 【意見交換】

Q 戦後にも童謡・唱歌はあるのか。

A 戦中から学校の科目は唱歌ではなく音楽に変わった。戦後、放送機関や文芸家達が一体となって、「みかんの花咲く丘」「里の秋」など多くの名曲が生まれた。

Q アメリカには子ども向けの音楽はないのか。

A 日本のような童謡はないと思う。日本は芥川龍之介のような一流文化人が子どものための物語を書く国だからなのかもしれない。